

<研究ノート>

## メディアと民俗

坂本 要\*

Media and Folklore

SAKAMOTO Kaname \*

### 1. メディアの定義と歴史

民俗学特に日本民俗学にとって「民俗」の定義はあいかわらずむずかしい問題であるが、以下は民俗をメディア論もしくはコミュニケーション論から見るとどうなるかという試論である。

メディアの概念は時代によって変わるが、60年代にメディアの概念を最大にまで拡大したのはマクルーハン<sup>1)</sup>とその周辺にいたトロント学派といわれるオング他の人々であった。オングは声の文化 (Orality) と文字の文化 (Literacy) の対比の中に文明史的な相違を見ているし<sup>2)</sup>、マクルーハンも「話された言葉」と「書かれた言葉」の本質的な相違の中にメディアの発生を見ている。両者ともに文字こそメディアの本質があり、メディア文化を方向付けたとしている。

メディアの具体的な定義で、よく引用されるのはレイモンド・ウィリアムスの『キーワード辞典』(1976)<sup>3)</sup>である。レイモンド・ウィリアムスは1950年代にその後のカルチュラルスタディーズに影響を与えた人物で『テレビジョン』他の著作があるが、この『キ

ワード辞典』も60年代以降に用いられるようになった新しいキーワードを、歴史を遡って意味を探っている辞典である。それによるとメディアはラテン語の *medium* (中間) の複数形 *media* からでた語で英語では17世紀には介在的または中間的働きもしくは実体としての意味に使われた。19世紀になると新聞や雑誌などの発達により、これらをメディアとよぶようになり、20世紀の放送の開始によりマス・メディアの語は一般化した。現在このような大量情報の伝達手段をメディアというようになっているが、情報の伝達即ちコミュニケーションの介在物・媒体をさすのがメディアの原義である。

メディアはコミュニケーションの際・中間に介入した手段である。A から B への情報の伝達 (communicate) もしくは移送 (transfer) の際の間接項・媒介物・媒体である。図示すると A から B になにかを伝達する矢印がメディアにあたる。

$$A \rightarrow B$$

$$(a \rightarrow a')$$

元来メディアは A から発した内容 a をそのまま伝えるという無色透明なもので意味を付

\* 情報コミュニケーション学部情報メディア学科、Tsukuba Gakuin University

加するものでないと考えられていたが、メディアそのものがメッセージ（伝達内容）をもっているため、内容 a は改変され B に伝えられた時には a'（ダッシュ）になってしまう可能性をはらんでいる。

50年代にはメディアの問題はマスコミの弊害やコミュニケーション一般の問題の中で論じられてきたが、メディアの意味を原義に戻し、メディアそのものの意味を問うたのはマクルーハンである。その結果、メディアを人間文化全体にまで拡張して考えた。マクルーハンの名著『メディア論（Understanding Media）』の副題は「人間の拡張の諸相（The Extensions of Man）」である。言葉・数・新聞・ラジオ・テレビ以外に貨幣・衣服・住宅・自動車・兵器等の25例を挙げ<sup>4)</sup>、メディアを人間の発明したものすべての表現媒体として捉えている。人間の発明したものはメッセージが強くあらわれていて、このことにより「メディアはメッセージ」なのである。コミュニケーション媒体としてのメディアは広く文明的もしくは人類史の意味をもつようになる。

マクルーハンはゲーテンベルグの大量印刷手段にメディアの転回点を求め『ゲーテンベルグの銀河系』<sup>5)</sup>を著わすが、オングにおいては文字の一般的使用による書き言葉文化の発生にまで遡って転回点を考える。時代はギリシア時代、プラトンのアイデアにそれを求めている<sup>6)</sup>。マクルーハンも文字文化以前と文字文化以降は大きなテーマである。

以上を踏まえて、私見によるとメディアの歴史は次の5段階もしくは6段階に分けられる。

1) はメディアを介しないでコミュニケーションをとるもので、身振り・声といった身体表現や直接行動で自己表現をしてコミュニケーションをとる。後で述べる伝承世界・民俗世界を形成している。

2) 文字・絵画・数字といった寓意・象

徴・指示といった記号群で、これを書くことによって遠隔地への伝達が可能になり、人間の思考や行動そのものを変えてしまったといわれる一次的メディアである。革命は紀元前に起っている。

3) この一次的メディアに大量複製を可能にする技術が加わった段階で、メディアの二次的発展ととらえられるが活版印刷の発明に始まる時代で、印刷された書物等が主になる。15世紀である。

4) は3) に始まる革命が社会システム・産業として大規模化する時代で、教育の普及による識字層いわゆる大衆が誕生する。19世紀から20世紀に掛けて可能になった。このように大量伝達手段となった新聞・雑誌以外にラジオが加わりマス・コミの語が使われる。映画・レコードといった視聴覚伝達が可能になり、電信・電話・テレビといったテレ機能・遠隔送信が可能になる<sup>7)</sup>。

5) 今日の時代でIT技術の発達で高速・大量の情報伝達が可能になる。マスコミの時代と大きな相違は情報が一方的に流れるのではなく受け手・送り手の双方向の送受信が可能になる。

まとめると次のようになる。

- 1) 直接表現・直接コミュニケーション  
身振り・声→伝承世界の形成
- 2) メディア表現  
文字・絵画・記号→象徴・寓意
- 3) メディアの複製技術  
印刷・銅版画・書物・プリント写真
- 4) マス・メディア（マス・コミ）  
電気通信・録音技術  
新聞・ラジオ・テレビ・映画  
電信・電話・レコード・テープ→大衆社会
- 5) IT（情報技術）  
パソコン・CD/DVD・ネット通信

## 2. メディアを介しないコミュニケーション

マクルーハンを読むと部族社会・部族人間・部族的の語をよく使う。部族社会 (Tribal Society) はメディアの対置語でメディア社会以前をさす。彼が文明的・人類史的発想を持つとしたのはこのようなことで、メディアを介在させない社会や文化を想定したからであろう。『グローバル・ヴィレッジ』では部族主義 (Tribalism) [訳としては部族生活のほうがよいと思われる] を多用するが<sup>8)</sup>、これは文字文化以前、非無文字社会を指し、このような文化を口承文化 (Oral Culture) といっている。少し長くなるがマクルーハンの考えがよくでているので、引用すると

「アリストテレスの時代から西洋世界の歴史はフラットで均一的で同質的な印刷の形で生み出された言語的専門主義が拡大する物語だった。口承文化はゆっくりと下降していった。中世の書記 scribe の (写本の) 文化はその性格上、口承的／聴覚的だった。写本は声をあげて読まれるものだった。教会の礼拝堂学校は、口承の忠実性を確保するために設けられたものである。ゲーテンベルグの技術は古代人の口承的-触覚的性質を吸い取り、言語体系的に築き、発音と意味に関する前代未聞の標準を確立した。」<sup>9)</sup>

アリストテレスのころから始まった印刷文化・文字文化はゲーテンベルグの活版印刷の誕生によって完成し、口承的、聴覚的、触覚的文化は崩壊もしくは新たな言語体系に再編されるに至った。口承的、聴覚的、触覚的文化はメディアを介しないコミュニケーションの文化である。話す (口承的) という直接的な身体表現と、聞く (聴覚的)・触れる (触覚的) さらには見る・嗅ぐ・味わうという五感で感じる文化だったのである。

「身振り・手振り・発声・語り」によって

自己の情報を表現・伝達し、五感によって受容する。時によっては体そのもので受容する。身体表現・身体受容によって成り立つ世界である。口承 (口誦・前述注8) も肉声を発するという身体表現の一つである。体で表し、体で感じる世界である。

声は歌になり、体の動きは踊りになる。それは印刷された文字による統語的な体系とは別の体系をもっている。私達は目つき・声色 (こわい)・味・香り・空気・雰囲気等といった五感で感じた世界を表すが、これらのことの細かい分節化や分別を言葉で表現するのはむずかしく、詩的・文学的表現にたよる。これらの五感の世界の豊かさは文字の表現を越えている別の体系だからである。

またこれらメディアを使わない直接コミュニケーションは共通の「場」同一空間において成り立つ。いっしょにいる、居合わせるという共時体験によって可能となる。簡単に言えば目の届く範囲、声の聞こえる範囲、手のとどく範囲のできごとなのである。マイクや拡声器を使わなければせいぜい数十メートルの範囲である。マイクや拡声器はすでにメディアなのである。テレビモニターにいたってはメディアの中のメディアといえるものである。映像と音の遠隔装置であるテレビは離れたところで同時体験をするような錯覚を与えるが、五感のうち見ると聞くことの二感による仮想空間としかいえないのである。そうするとノンメディアワールドの場としてはスピーカーもモニターも電光掲示板もない草野球場や競技場が最大規模の施設であろうか。

その意味で口承文化・メディアを使わない直接コミュニケーションというものが、空間的に狭い共同体の中でのみ成り立つと考えたり、自給自足という前近代の社会をモデルとして成り立つと考えられてきたのは当然である。これがマクルーハンのいう部族的社会である。

コミュニケーションとは情報の伝達とそれ

にともなう感情の交感である。メディア以前もしくはノンメディアの世界は身体と五感の直接コミュニケーションでなりたっており、そのコミュニケーションを共時体験できる同一空間の「場」が必要である。

この口承文化は歴史的・時代的に過去のものと考えする必要はない。今日でもあらゆるところに小範囲の共時体験の場はあるわけで口承文化はそこに出現する。しかし現代社会においてメディアはあらゆるところに介在しているわけで、ないわけではないが口承のみの空間や場を出現させるのはやさしいことではない。

### 3. 伝承文化の意味

メディアを使わない直接コミュニケーションの文化・世界を表す語を口承世界・口誦文化・ノンメディアワールドといろいろと使用してきたが、ここでもう少し用語の問題を含めて厳密化したい。話を私の専門である民俗学に移そう。というのは口承（口頭伝承）・部族社会・無文字文化これらの用語はいずれも文化人類学・民俗学で使われ、長年論議されてきた言葉だからである。

マクルーハンが口承文化という語を使うが、口承文化は Oral Culture の訳で、口承は口頭伝承の略語で Oral Tradition の意である。Oral は口でとなえることなので、中澤豊訳の『メディアの法則』では口誦の語を用いている。（注6参照）このほうが訳としては適切ではないかと思われるが、日本では口誦の語よりも口承の語が一般的で、例えば、口承文芸のような使われ方をしている。口承文芸を始めて用いたのは柳田国男で、『口承文芸史考』の冒頭の「口承文芸とは何か」の「1. 新名称」（この部分は昭和7年発表）の中でフランス語の la littérature orale からの訳のいきさつを述べている<sup>10)</sup>。

口承と伝承を考えてみよう。口承はいま述

べたように Oral Tradition の訳で口頭伝承で Oral を口頭と訳したのが誰かは不明であるが、Tradition を伝承と訳したのは柳田国男のようだ。

日本民俗学は柳田国男によって始められたので、用語も柳田個人の造語であるものが多い。民俗・民間伝承は柳田の造語である<sup>11)</sup>。口承文芸・口頭伝承もさることながら伝承そのものも柳田以前にはあまり使われなかったか、意味が異なって使われていた。それまでは伝承は「つたえきく」、「人づてにきく」という聞き方の一つとして用いられていた。承はうけたまわる、聞くことの意味である。柳田は『木思石語』の「伝説と口碑」（この部分は昭和3年8月発表<sup>12)</sup>）の中で「民間の口頭伝承」とは「口と耳で受け継いでいる昔のもの全体」としている。「承」は単に聞くことではなく、受け継ぐという意味に使っている。受け継ぐの意味もあったが、伝え聞くが一般的であった<sup>13)</sup>。

その後昭和9年に柳田は『民間伝承論』のはじめの節「凡俗知識の研究」で民間伝承がフランス語 Les Traditions Populaires の訳であることを言い、Tradition を「伝統」と訳すと「色々政治上の聯想があつて困る」ので「伝承」としたとある。これより前に出したさきほどの『木思石語』「伝説と口碑」（昭和3年）の中で「我々が通例伝承と訳しているトランジションは、事によると永年の法律制度のような、ある少数者の権力者の考えで定めたものまで、いっしょくたにされる懸念があるゆえに、特に民間の伝承と断らなければならない」としている。権力者の定めたものとは伝統を指す。このように伝統と伝承を使い分けながら、口頭伝承（昭和3年）・口承文芸（昭和7年）・民間伝承（昭和9年）と柳田独自の民俗学用語を作っていく。ちなみに民俗学の語を正式に使用するのは民間伝承の会を結成し、日本民俗学講座を日本青年会館で開設した昭和10年である。

このように柳田国男の民俗の概念形成には伝承の語がキーワードになっている。柳田は伝統を避けて伝承の語を選択し、伝承を伝え聞くから伝え受け継ぐことの意味に選択したわけであるが、承の字にどのくらいの重さを見たのであろうか。

承の字を考えてみよう。承の字は白川静の『字統』と諸橋徹次の『大漢和辞典』で少し異なる<sup>14)</sup>が両手で物もしくは人を受け支えている象形文字であることは共通している。鎌倉時代に流布したとする日本の古い漢和辞書である『類聚名義抄』によると承の和訓の一つに「テツカラ（てづから）」とあり自分の手で・おのずからという意味があった<sup>15)</sup>。このように伝承の承は手から手へ受け渡したり、差し出すことをあらわしている。その意味で伝承とは手わたすということによって伝える、直接の身体コミュニケーションによって成り立つ行為であると言えよう。伝承はこのように受け継ぐまたは受け継がれた文化である。その受け継がれ方がメディアを介しない、身体伝承・口頭伝承であるところに特徴がある。柳田は口頭伝承を口と耳で受け継いでいるといったが、これを伝承文化に広げて考えると口と耳と体で受け継いでいる文化といえよう。

用語の問題として伝達と伝承の違いがある。トラディション (tradition) を伝統と訳さないで伝承としたことは述べたが、コミュニケーション (communication) とは空間的相互交流が可能な伝達である。トラディション (tradition) は世代間の時間的な伝達で、しかも時間は可逆的でないから原則的には一方的なものである。しかし、受け手の若い世代が変えてしまうことは可能であるから、可変的でもある。このように制約はあるものの世代間交流としてコミュニケーションの一形態として扱えるのではないかと考えられる。

民俗は民間の伝承文化である。これは柳田

の定義でもある。民俗の「民」を民衆や階層的に被支配階層としたり、基層文化というドイツ民俗学の用語を使ったり、常民という柳田の語で限定しようとする論は多い<sup>16)</sup>。しかしこの論考ではコミュニケーション論からみた民俗なので、伝承ということに定義限定して規定した。文字社会にあっても文字を使用できない階層がある。日本でも教育の普及しなかった明治以前は農民の過半が文字を読めなかった。結果として下層社会の人や民衆は文字を使用できないから、民間の文化には文字以外の伝達手段にたよる文化が存続する必用がある。文字以外の文化は広く深く、人間の根幹に根ざしている。とすればこれを基層文化、無意識の文化といえることができる。文字社会での文字以外の文化なので無文字文化ではなく、非文字文化とするのがよいかもしれない。

民俗を伝承文化、伝承によって育まれた文化とすると、承の字に示されるように、民俗文化は人から人へ (man to man) の文化で、顔を見ながら (face to face) 手渡しする (hand to hand) という身体性をともなう直接コミュニケーションの文化であるといえる。

#### 4. 民俗の発見

伝承と民俗、身体伝承・口頭伝承が民俗文化の中心概念になるといったが、民俗学の創始者たちはどのようにして、そのことに気づいたのであろうか、折口信夫・柳田国男・宮本常一の三人の思考のあとを追ってみよう。

##### 1) 折口信夫

折口信夫が民俗学を知るのは、明治43年刊の柳田国男の『遠野物語』を通してと思われる。折口は大正3年の冬この本を神田の露店で買ったとあるが<sup>17)</sup>、大正2年12月に柳田の主管する雑誌『郷土研究』に「三郷巷談」

を投稿し、掲載されている。「三郷巷談」は『遠野物語』の記述様式を模したもので、投稿以前に『遠野物語』は読んでいたと思われる。この『遠野物語』の折口に与えた影響は大きく、昭和10年の『遠野物語増補版』（郷土研究社刊）の後記は折口が書いている。問題は柳田が民間の口碑伝説を歴史として扱うとする以前に、折口が言語の音の部分、言語の発声による歌や語りに興味を持った。折口信夫は万葉集他の和歌を学び、自身も歌人として大学在学中より活躍する。卒論はこの言語としての和歌の特徴を素材にした一般言語論で「言語情調論」<sup>18)</sup>となっている。冒頭に「言語は音声形式の媒介による人類の観念表出運動の一方面である」という定義があり、和歌の枕詞や託宣言語を例に言語情調の要素として音声の音質・音量・音脚などを細かく分析している。折口の主張は言葉は音で聞くもの、文字では考えないと考え、その後の民俗学的研究の基本的な方法とした。なぜなら伝承とは音で聞き、口で語る世界だからである。「ものがたり」にしろ「かたりもの」にしろ語られたもの、話されたことを耳で聞く、折口学では耳で聞く文学が文学である。和歌も歌われたものを聞くことから始まったのである。折口が言語の音声部分に注目して卒論にしたということは、柳田国男より早く方法としての民俗学を確得したということになる。非文字文化・伝承文化としての民俗の発見である<sup>18)</sup>。

## 2) 柳田国男

柳田国男が伝承文化・民俗に至る過程は紆余曲折しており、時間がかかった。柳田が民俗学的著作を出すのは明治42年の『後狩詞記』と翌43年の『遠野物語』である。これらの著では口碑伝承を方法論とするという自覚よりも「平地人をして戦慄せしめよ」という遠野物語の初版序文の語に思いがあったようである。後に「山人考」としてまとめられる

が、山地には平地人とは別の人・別の人種がいるというロマン的な思いにとらわれる。この時代はまだ民俗の話は用いず郷土研究といていた。しかし口碑伝承を歴史の資料にするという考えは、以降昭和に入ると明確な形をとってくる。前章で述べたが、民間伝承による歴史の再構成という方法論的自覚とその方法による民俗学の大成である。昭和3年『木思石語』に口頭伝承の語が、昭和7年に「口承文芸史考」、昭和9年に『民間伝承論』と柳田独自の民俗学用語が次々に形成されていく。昭和10年民間伝承の会を結成し、日本民俗学講座を日本青年会館で開設し、民俗学の語を使用し、調査方法の確立とともに体系化をはかる。一応の完成は関啓吾との共著で出した昭和18年の『日本民俗学入門』と昭和19年『国史と民俗学』（主要部分の「国史と民俗学」は昭和10年発表）であろう。「国史と民俗学」の核心は、「三 記録文書主義」「四 記事本末体」の章である。批判されるのは従来の歴史学の文献主義で、その政治性と為政者が教育のため記した作為性を批判した。つづく「五 単独立証法」では、これも文献史学が一回性のものしか扱えず繰り返しの文化をとりあげていないという批判で、この裏には『民間伝承論』で述べた重出立証法という周囲論による歴史の再構成という柳田の方法があった<sup>19)</sup>。

ともかくも柳田の伝承論には文献史学批判が強くでており、文字に書かれなかった歴史、無意識に繰り返される行為というのが民俗学の中心にあるとした。それに対応する文化を昭和6年の『明治大正史 世相篇』では「新色音論」「村の香り 祭りの香り」で、昭和14年の『木綿以前の事』では木綿の触覚について等を取りあげて、五感の文化の必要性を位置づけている。柳田民俗学の成立は文字以外で伝承された文化・五感の文化の発見にあった。

## 3) 宮本常一

明治40年生まれ、宮本常一は柳田国男より32歳下で、昭和10年民間伝承の会を設立した時28歳の最も若いメンバーとして世話人に選出されている。ほとんど同時に渋沢敬三と会い、アチック・ミュージアムの仕事もするようになる。大阪に拠点を置いた宮本常一が中央の民俗学に接した時は、柳田の民俗学が完成した時だったともいえる。宮本はその後ほとんどアチックの仕事で全国を歩き、調査と報告を続ける一方、地域振興等の実践に励む。その意味では学問の体系を打ち出すタイプではなかった。見聞記と報告は膨大で写真を含む資料はそれだけでも価値がある。「あるくみるきく」<sup>20)</sup>とはまさに宮本常一の生き様であった。民俗を「無字文化」といい「文字を媒介としない文化」と明確に定義するが<sup>21)</sup>、実際には文字が入ってきていることを認め、地方（じかた）にある書かれた記録は資料として大事にした。生産資料の収集は経済経営を専らとする渋沢敬三の目的でもあり、柳田が敵視したような文書資料の否定はなかった。渋沢の命により、民具の蒐集につとめたが、調査はその民具を使う農林水産業の技術伝承、民具を作る職人の技術に調査を集中した。自分自身が瀬戸内海の周防大島の出身であり、漁民の漁撈技術とその伝播の調査にはすばらしいものがあつた。言い方を変えれば民具を通しての技術伝承・民具の作り方・使い方、それを宮本は民具とそれにもなう動作と知っているが<sup>22)</sup>、体で伝える身体伝承・最近の言葉では身体技法に民俗を見いだしたと言える。宮本民俗学は民具という「もの」と技術伝承の「ものづくり」という民俗なのである。これもまた非文字文化の伝承といえよう。

以上この三者を通してわかることは折口信夫・柳田国男・宮本常一のいずれも文字を用いない直接コミュニケーションの伝承世界を

探求したということである。民俗の発見とは文字以外の文化の発見にあつた。

## 5. まとめ —メディア社会の中の民俗—

いままでの論をまとめると次のようになる。

1. メディアとはコミュニケーションの媒体物である。
2. メディアは文字の発明から始まる。
3. したがって人間の文化には文字の発明以前のノンメディアの時代が考えられる。
4. それは身体と五感による直接コミュニケーションによってなりたつ。
5. 直接コミュニケーションが可能になるには「場」が必要である
6. 現在でもこのような場は可能であるが、メディアの介入する機会が多い
7. 日本民俗学ではこのような直接コミュニケーションによって受け継がれることを伝承という。この語は柳田国男によって用いられた。柳田国男はこの伝承文化を民俗と叫んだ。したがって民俗とは直接コミュニケーションによって受け継がれる文化をいう。
8. 直接コミュニケーションの場があれば現在でも民俗はどこでもある。共同体や伝承母体を前提としなくても個々のコミュニケーションでも可能である。具体的には教室でも友達同士でも民俗の伝承は可能である。

最後にその一例を示して終わろう。マクルーハンによれば、すべての人間の発明物はメディアであるとされる。人間の機能拡張をになった「もの」であり「機械」である。文字は「もの」である。私達はメディア社会の中に生きている。しかしこの「もの」や「機械」を使用したり、動かすのは人間である。もし「もの」や「機械」を作っ

たり、使用する「こと」に直接コミュニケーションが行われれば、それはメディア社会の中の民俗になる。パソコンはメディアであるが、パソコンの操作がわからなくなった時、となりの人に話しかけて聞くことがある。あればその行為から民俗が始まる。

### 注

- 1) M・マクルーハン『メディア論 (Understanding Media)』1964 訳1987みすず書房  
M・マクルーハン (1911～1980) については60年代に活躍した過去の人との評価もあるが、その論の壮大さと難解性のため全体理解が進んでいない。  
「マクルーハンが残した書物はどれもむずかしく、話があっちこちに飛びまくり、奇妙きでれつな呪文のようなどころがあって、私にはよくわからないところがたくさんあります」水越伸「メディアとは何か」『社会情報学Ⅱメディア』東京大学社会情報研究所編1999東大出版会
- 2) W-J・オング『声の文化と文字の文化』1982 訳1991藤原書店
- 3) レイモンド・ウィリアムス『キーワード辞典』1976 訳1980晶文社
- 4) マクルーハンがあげている例は以下の25例である。「話されることば」「かかれた言葉」「道路と紙のルート」「数」「衣服」「住宅」「貨幣」「時計」「印刷」「漫画」「印刷された言葉」「車輪、自転車、飛行機」「写真」「新聞」「自動車」「広告」「ゲーム」「電信」「タイプライター」「電話」「蓄音機」「映画」「ラジオ」「テレビ」「兵器」「オートメーション」
- 5) M・マクルーハン『グーテンベルグの銀河系』1962 訳1982みすず書房
- 6) 同じ意見をエリック・A・ハヴロックが『プラトン序説』1963 邦訳村岡晋一新書館1997の中で述べている。
- 7) 視聴覚伝達可能・遠隔送信可能によって時代を区切る必要もあると思えるが、年代が近接・複合しているので一つのまとまりとしたが、ここで時代を区切ると6段階になる。
- 8) M・マクルーハン『グローバル・ヴィレッチ』1989 浅見克彦訳2003青弓社p29・p102他「Oral Culture」の訳は浅見克彦訳『グローバル・ヴィレッチ』では「口承文化」であるが中澤豊訳『メディアの法則 (Laws of Media)』1988訳本2002 NTT出版では「口誦文化」の語をあてている。P83「東洋文化あるいは口誦文化には個人主義は存在しない」
- 9) M・マクルーハン『グローバル・ヴィレッチ』p80 誤解のないように補完説明すると、マクルーハンはマスコミとそれに続くIT社会を文字以前の世界の再来ととらえ、もう一度部族の村社会が世界規模で再現されることを願って「グローバル・ヴィレッチ」の語を使用した。強いて訳せば「地球規模の部族村社会」となる。
- 10) 柳田国男『口承文芸史考』1947中央公論社(『定本 柳田国男集 第六巻』)1968「口承文芸とは何か」は「口承文芸大意」として岩波講座「日本文学」(昭和7年1932)に発表したものである。
- 11) この間の事情については平山和彦『伝承と慣習の論理』1992吉川弘文館に詳しい。
- 12) 柳田国男『木思石語』(昭和17年1943)「木思石語 一」『旅と伝説』昭和3年8月号(1928)
- 13) 『日本国語大辞典』第14巻 小学館1975「でんしょう」の項 声にだしてとなえ伝える、もしくは読んで伝えること伝誦・伝唱の漢字を使う。
- 14) 「承」を両手で受けているか、支え上げているとすることは共通しているが、白川静は座っている人を支えて、目上の人の命令を受けることとしている。諸橋徹次は君主から授けられたものを受けるもしくはささげることの象形としている。白川静『字統』1984『字通』平凡社1996・諸橋徹次『大漢和辞典』大修館書店1956



- 15) 『類聚名義抄』の原撰本は1100年に成立したとされるが、改編本は大幅に増頁され1220年頃から流布したと見られている。承の異体字 **乗** は改編本である観智院本の「佛」の巻の下本に見られ、和訓がついている。参考 吉田兼彦「解題」『天理図書館善本叢書 和書之部 第三十四巻 類聚名義抄観智院本 僧』1976年 天理大学出版部
- 16) 伝承文化をそのまま民俗とするには若干異論がある。民俗には「民衆の」「民間の」さらには「常民の」「基層の」という社会的・文化的階層性をもっているとする意見である。平山和彦「民俗」の項『日本民俗大辞典』吉川弘文館1999
- 17) 長谷川政春「評伝」『折口信夫事典』西村亨編 1988大修館書店
- 18) 明治43年(1910) 稿として国学院大学に提出された。第三編以降は目次のみで完成されていない。旧『折口信夫全集29 雑纂編1』中央公論社1957に収録されている。折口信夫の「言語情調論」に關しての部分は坂本要「日本的念仏の三円構造」『宗教民俗研究 No.18』(宗教民俗研究会 2008年)に重複する。
- 19) この重出立証法については戦後批判がでる。「特集民俗学の方法論」『日本民俗学』No.60日本民俗学会1969他
- 20) 「あるくみるきく」は1966年に近畿日本ツーリストの中に設立された宮本常一が所長を務めた「日本観光文化研究所」刊の雑誌名。
- 21) 宮本常一「日本民俗学の目的と方法」『民俗学への道』1965岩崎美術社『著作集1』未来社 p19 p21 1968
- 22) 宮本常一「民具論」『生活学論集 I 民具と生活』1976ドメス出版『著作集45』未来社 p338 2005
- 1997新書館  
M・マクルーハン 1962『グーテンベルグの銀河系』訳1982みすず書房  
M・マクルーハン 1964『メディア論』訳1987みすず書房  
M・マクルーハン 1988『メディアの法則』中澤豊 訳2002 NTT 出版  
M・マクルーハン 1989『グローバル・ヴィレッチ』浅見克彦訳2003青弓社  
W-J・オング 1982『声の文化と文字の文化』訳 1991藤原書店  
レイモンド・ウィリアムス 1976『キーワード辞典』訳1980晶文社  
折口信夫 1903「言語情調論」『折口信夫全集 29 雑纂編1』1957中央公論社  
坂本 要 2008「日本的念仏の三円構造」『宗教民俗研究』No.18 宗教民俗研究会  
白川 静 1984「承」『字統』平凡社  
長谷川政春 1988「評伝」『折口信夫事典』西村亨編大修館書店  
平山和彦 1992『伝承と慣習の論理』吉川弘文館  
平山和彦 1999「民俗」『日本民俗大辞典』吉川弘文館  
水越 伸 1999「メディアとは何か」『社会情報学 II メディア』東大出版会  
諸橋徹次 1956「承」『大漢和辞典』大修館書店  
宮本常一 1965「日本民俗学の目的と方法」『民俗学への道』岩崎美術社『著作集1』未来社  
宮本常一 1976「民具論」『生活学論集 I 民具と生活』ドメス出版『著作集45』未来社  
柳田国男 1938『遠野物語 増補版』郷土研究社  
柳田国男 1943『木思石語』1943三元社『定本柳田国男集 第五巻』1968筑摩書房  
柳田国男 1947『口承文芸史考』中央公論社『定本柳田国男集 第六巻』1968 筑摩書房  
吉田兼彦 1976「解題」『天理図書館善本叢書 和書之部第三十四巻 類聚名義抄観智院本 僧』天理大学出版部

#### 参考文献

エリック・ハヴロック 1977『プラトン序説』訳